

仇潜雪のつむ

利9
3869
65



八割 9
3869
巻 65

ゆきのなまきけ絶きしとて春のよとの
水よりいづれをば採らるをとりて和気乃
りをちもやう乃ひ天のつゆとてまじる
に—— 燃潜のほあひ山又くはとく
お城乃ちまにとてとれ水子あしとらま
似たりそまがらまのほららとまを何ぞ
ぬくの附向といふへまの世は世なり

大正八年四月十日
室井平藏贈

もてしやをる俳書まよ中よ河歌
判者の高志の句とて打こし前句
をも記す凡只一句とありて附合也
もしよ編るものありきを帯一音
に首を込むくの類ひしと玉川れ
はまかなるもいれくお濠と成時を
誰かたよと記誰の牛は飼んあしよ

三世の中へ居れ寄りを清しきのみ
秀の句とてさうこれ社中よりと集て
書林河系探まよのさんしをら
於之句のさうりろさ味と夏川か
後の集と妻一はま今河をうら
そよふれまかりんおあしあや
潤節のあましよまよとなるとをら

と歌子河うほーを

子観亭此処一吐月序

明和四丁亥年水月

雪のつむ

枕鏡著

雪中菴藝方傳

卷中秀逸



枕子風の葦子表而亭

撥日記京北茶粥も喰ひ

あゝ渡天乃侍者もさる

ふくみ遊の下さゆまなま
憲法のおきいと橋のうくれ津
今と鈴麻の鬼と十八

洞もあめく交てわらぬ
申し一さふかうも口のきあれい
災をりみけ風 ききふるなり

おぼあまそきて院も中ぬま
玉の名とすいおらとせふお指
誇中あまき舞子あまこく歌

ちりりくときひよのあふ
歌謡の浪軍の七年の舞
あまこく人紙 指抄

浪と破船のらうーとたふ
鳥ぬくぬきと海客のきき
花より悟り子の鏡をぬく

るるーとてふとてふとてふ

福美のまじりかうかきか

さう尾とさうてふ茶てかき

又お局乃喰うやうてふ

ふとてふはの七文字とてふ

只小刀の細工やんあう

はるも腹かきとてふはる

お椒つとてははるやう

茶とてふの名はる子母の船

敵う志もくもあせちのうれ
わびしきとる極はくもいふれ
波も安ふ新志余れ 暮

極ののりも極れしき
田も畑も草も麻のうら
今より熾も穢てみれあり

いつもの遊路乃らあり
道乃らる後乃果一たよ
勢勢へしと極摩とり 台

たもいあうも情のまぬく
たおもあふも志のむ武花坊
たもいあふの節化あり

祇園のふしは子のふし
あつらひはふとあつらひ
磯石のふしと清く命ととも

あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ

あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ

あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ
あつらひはふとあつらひ

ふしひつらふし目新やうて
秋をよめておのふふふふふ
はらふふふふふふふふふ

二二二板とねもふふふふふ
はらふふふふふふふふふ

ふのふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ
ふのふふふふふふふふふ

かくやくと息の脈のふふふ
ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ

ふふ中々ふふふのふ
ふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふ

澄くもを川角力元の玉書
あまかひふハ情山流

又文字の垂しをすハむふ

搜しともそふぬ又物の玉書

何をあまて為むさく

うらまゝの物流流もまぬ連

狐火をらと妻れとくた

あまかひふハ情山流

似味らしとま流くあまか

あまかひふハ情山流

あまかひふハ情山流

還信とてあま流くも志る

夕風のはら城下の果地
土留居及 障子きき
菊並くくくは所の猿まう

之光啼く悲しくし
春篠の草と山もあや
思留ひりたれ 森く

一刷毛方れ 峯子落く
河申くは後まをぬく 糸堀
何くは猿を曲く 春夕

あまぬふとこくたふ
お沙流くは春親友のま
河終をひきふ乃 糸七神

ちんちんも月の影ぞく秋の夜
なよん寝くもる四十七
まをこの夜をちよよあつーらみ

指の薫とひくそは切の雨ら筋
枕の巾子むくくとおほ首

白果よよとあて遠の出ととちみ

名月とてしうとそそらちり

房芳て幻位居のそあつり

あつと芋の葉とつゆら

あてまをまてて寝の相おみ

作らまは鳥よ枯風とそま

夕風のつらに津候子おひら

ついでとて何れもさう時時鶴
墓の掃除も百石、
連判は是れはひらりーしる

織子のひ中よ士用思ふ、

らり〜とまは懐子と治長

又見取の如産割藤

渡一呼時と足押も百石の多

由産の紐はと箱と沙所あり

今し〜り鏡の中と懐を〜て

ゆつ〜と〜もたの袋下ろ

傍子牛〜川〜の糞ぶ推

手形遠〜の糞〜り〜

朝のききぬるもいづれも
猫もよまればは庭の掃くは
〜〜〜

〜〜〜
は皮も湯うけては餅の湯に
〜〜〜
〜〜〜

〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜

〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜
〜〜〜

城と海とのまじり合ふ
舟の帆に吹かす風は
懐くもよみと今のかげの
し

波のうねり
中程子ある磯乃し
し

舟のまわり一ヶ月の秋
高きうら
深柳の虫さへ赤子
し

舟のまわり
まじり合ふ
又まじり合ふ

志く信のきよめあめり
陸原乃妻と似のさか
海よりふも向ふら切

神よりふれ言の様を
暮る目と花うかす
孝りの扇子懐もあつら

懐れりもあ別を
瑞雪のきひを
此産の細とをれ

皆らん送のあわの
くぬくもき入礼の
貸あふとや蜂の

神より経路を尋ねてはる月
何れもまゝと好か振舞
侍候を申しせり様此附心

小粒の如くして主の心とて
あり申すは所存とてまゝに
流るる流るるをまゝにたす

夏占の痛き事
何れも海の人乃降を
中より申し候 俄 ぬぬ

葉もけも振るける中葉を
お母もやうにまゝに申す
尾ひより神の淋しき事

海州のちも都方おろし
あつらはもち作流し
まひ人々遠くの唾の何ら

狐くすと憎らま友 連

雲の秘 密 投てまふ時

忍ぶまもる 采女 庫の 早書

お風をのめくしをのめ

唯し 月 此 方 待 千 金

夏切の法も内後もあつら

しつらあひの神を流し

万くまもるお母のあつら

おしとくさきり計のしき
けしははまき種とつん
あきしん船も個れ船引手

あきしん船も個れ船引手
あきしん船も個れ船引手

龍也二つん子堀龍の友馬

龍也二つん子堀龍の友馬
龍也二つん子堀龍の友馬

龍也二つん子堀龍の友馬
龍也二つん子堀龍の友馬

旭々 乃 既 乃 母 一 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

ねんころしんころしんころしん
ころしんころしんころしん
ねんころしんころしんころしん

母の中を寝るよその川
あそびのなれり
かくあそびのなれり

まき風入於汗のぬるま
まき風入於汗のぬるま
まき風入於汗のぬるま

まき風入於汗のぬるま
まき風入於汗のぬるま
まき風入於汗のぬるま

灘あえそかのく結る井田陶
権系ひりり物ゆゑ六十一
おうとぬも折も七の元心

少西の算加子阿多る及氷
まゝ八十のまゝ居る六十一
かゝる温泉乃ち安子阿多る及氷

凌雪の如き子阿多る及氷
世と川流乃ち浮川流る
後ろゝ算かお纏る六十一

十月の結氣もあくと最良
海流ハ流れき硯なり
ちをたすてゝあゝ流の如く阿多る及氷

猪くら〜と小猪のみり
か〜おまよはぬはのちりて
その字はあ〜おまよ一編

尾ま〜とまは面も色〜

ま〜おまよはぬ商人もまよひ

魚のをさ〜とみれまはあ〜

ねまの〜と色〜とら〜

か〜も伸〜と猪のち〜

休〜と〜と桶乃出〜と〜

悟〜と〜と〜と〜と〜

袴〜と〜と〜と〜と〜

指〜と〜と〜と〜と〜

むーのぬきれ 合口
るのり乃 碇子屋氏のぬきをり
かゝ園習のあを 沖子あゝ

秋とさきりき ぬきけ橋
おきき 浪軍ののぬきと
まきき ぬきき ぬきき ぬきき

捜ーぬきぬきぬきぬきぬき
連てぬきぬきぬきぬきぬき
護摩のぬきぬきぬきぬきぬき

ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき
ぬきぬきぬきぬきぬきぬき

あはれと人衆のまれよかり
けむる淋しれよの目あれ
あはれとけいこう乃 秋

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

あはれと人衆のまれよかり

柳灯も清く、夢の乱窮
揮き身鏡の影れあはる
露一草とて、つらきよきよ

著の精ん、半とハ助
鏡と鏡もあらのれか
まの悟もあはる、たまた

らあ甲子編く、経冊
あつらふ、浮世鳥も、通ひ
あつらふ、あつらふ、あつらふ

雛形と、次子の、あつらふ
さうと、あつらふ、あつらふ
あつらふと、あつらふ、あつらふ

月のまじりてはるかに
ゆきかきつゆをうら
かたそとくは雲は仇波

あまのこころは
あまのこころを
あまのこころを
あまのこころを

胡蝶のまを
つとむる
つとむる
つとむる

かたむねを
かたむねを
かたむねを
かたむねを

結城の藤斗八似ておま
きぬくたの藤斗八は
さく竹の女房ふひ茶のあひま

あはれやう流の白糸うり
ゆきあはれふりもやうてあはれ
あはれとて藤斗八と赤輝

藤斗八のあはれ
あはれとて藤斗八のあはれ
あはれのあはれあはれひつつか

あはれとて藤斗八のあはれ
あはれとて藤斗八のあはれ
あはれのあはれあはれあはれ

然風をよく夕暮所とて
まゝに居る楊花社の名柳
却移しく詠れ 寂 莫

かうてふふいと書き出はす所
作書とては殿とのよおのれ
後河の菰子羽とありけり

朽とてふえとて深きまに
惟くまゝとてのんふきとて
まゝに居るけりふれお世界

此報多しとてさういふに耐は
高之人作丹 百 摺
けりまゝは是の錢も多しとてかゝり

後をいつのまにぬきまへて代
手は是れも同じ日記の書は
治業の法と花柳まへく

手のはぬき日記の書は
治業の法と花柳まへく
甥とてに新株の産み役あり

治業の法と花柳まへく
おのたられ新株の産み役あり
熊坂の法と花柳まへく

治業の法と花柳まへく
治業の法と花柳まへく
治業の法と花柳まへく

音の目せめてはく二つは目
都申一よふぬれ秋々せ
福ろう梅つく胸を悲きくま

銀くつふれて誇れつこ
さうくはなはたの御乃梅也親
きふもみ乃千あま ちかふ

いふ歌の歌うらゝむわさうく
あまのこいさかへはなはたのよて
河の低峰よりあまのたうらあは

さよひやうよえの歌はたけ
かゝ後のおのくはなはたのよ
新峰初られはなはたのよ

心のかげをうらみしる歌
まはれは清きあまのついで
心のかげをうらみしる歌

心のかげをうらみしる歌
清きあまのついで
人質とてまじりて風の中

海をわたるまじりて風の中
清きあまのついで
心のかげと母れ判る

和のついで清きあまのついで
あのかげとてまじりて風の中
心のかげとてまじりて風の中

物として成る宮中の草紙布
灯籠の土俵 八町
まじりたる目柄のこたはりのある

入梅の飯の物かきとらひ
美登世のしるしと記する
しるし通河のいぬやうなあり

大徳のちよひのしるし
あつゝと記しつゝとらるるあり
まじりたる目柄のこたはりのある

揚巻の味物のしるし
みまの目柄のこたはりのあり
白紙と水はりのしるし

ふたつは河のまが子と舟うら
まが子と雛子のちうおし
振向てまが子村のおわしけ

まが子のこころふかき
はなもももあつかり
月まつる花まつけても清い波

癪癪と中と浪一箱もまが子
まが子と雛子の
かた村まが子と命のおし

まが子と雛子のちうおし
まが子と雛子のちうおし
まが子と雛子のちうおし

移玉のさむ花の月のまき
虫のさかへてまはれし面
たうすー後の具たうまぬる美

まきの世と都てまき
松のよりいふこと撰集
夏は秋乃勝子ち用とああり

海鏡子能と記とるる名形
禁好物は勝子ちみわと
夕の後の夜をのしくまといふと

巨を腐ととるぬる美人多し
又月の揚屋子浅し面白
男おえふのまきへの句

九四
弱し結に才揚めくまはて
而と習て思ふはあきらふ
掬はよ冬れ梅の一二りん

先程を従くと初年と
切して心まよひの京州履を
かきまわらうと二階はあはれ山

市玉後あしめくくまを
流るるむれ洞のうさよ
風をまき葉子侍程の紐とけて

あめつむ白粉解とみ粉結
そのようしひのあふ履をさなる
帳をとりくえれを思は侍あつて

梅子ののちさるれ只中

懐くささか推さる保入さか

かゝるとひさしの西園あゆし

きましくはふよまの乳房崎

かゝのあまももさるおむけ

千あのおろ推たさささ

あま少附れ 終年 傘

あまれらむと合点のさる月

一番鐘の竹鐘ささる 糸

高き風切らせさをささく

幾度うあまのあまの人ささる

是ささるまきか悟ささささ

~~雪~~
~~中~~

誘ふあわれをい出湯の一掃
おまへに杖杖もハふ度く
をいせらるるゆきの杖杖——うり

より一筆書きなるといふことよむか
楫控ふまゝぬ顔よおのぼり
追人よ先へ浅舟く——り

~~雪~~
~~中~~

雪中菴蓼太撰

雪乳績

後篇出来
篇次追出

日本橋南壹丁目

東都 須原茂兵衛

